

## 紀昀の見た烏魯木齊

—— 清朝による辺境開発の一側面 ——

山口 博子

### ◆要旨

紀昀（一七二四—一八〇五）は清代乾隆年間に活躍した学者であり、また文人である。乾隆三十八年には『四庫全書』の総纂官に任命され、その一大事業に精力を注いだ。退官した後、長い役人生活の中で得た珍しく不思議な話が、『閔微草堂筆記』（全五種）に記されている。その中には、一七六八年から三年間にわたり左遷されていた烏魯木齊やその周辺で得た八十三話が収められており、砂漠の広がる辺境地帯に城郭が築かれていった様子や、西域ならではの珍しい風景などが主に記されている。また、都へと戻る際に「烏魯木齊雜詩」百六十首を作り、『閔微草堂筆記』にもそのうちの何首かが引用されている。本稿は、実際に紀昀が見聞した話と詩を併せて読んでいくことにより、当時都市化しつつあった西域の変化の様子や、生活していた人々の姿をより具体的に探ろうとするものである。

都から遠く離れた流刑地に過ぎなかった烏魯木齊は、清朝中期以降、都市としてさらに発展していく為の基盤を築きつつあった。紀昀の記述からは、当時の風景や人々の生活の雰囲気を感じることができる。詩の中では、左遷されたことへの嘆きや境遇の辛さなどの心情について詠うのではなく、農耕を行う人々の姿や演劇を楽しむ様子、また街が整備されつつあり人々の交流も盛んであった様子など、生活の中で見聞した出来事を描写しようと試みている。一方で、『閔微草堂筆記』の中では珍しい出来事を記すことの方に重点があり、具体的な西域の街の様子などを題材として描かれることは少ない。両者ともとるに足らない日常の一場面を切り取り、当時の姿を描写しているのである。都市として発展していく最中にあり活気あふれた辺境の地で過ごした体験が、紀昀にとっての文学の世界をさらに広げていくことへと繋がっていると見える。

**キーワード**：紀昀、清代乾隆年間、中国の西域都市、「烏魯木齊雜詩」、『閔微草堂筆記』

（2009年9月18日論文受理、2009年11月6日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

### はじめに

紀昀は清代乾隆年間に活躍した学者であり、また文人である<sup>1)</sup>。乾隆三十八年（一七七三）には『四庫全書』の総纂官に任命され、その一大事業に精力を注いだ。退官した後、長い役人生活の中で得た珍しく不思議な話が、『閔微草堂筆記』（全五種）に記されている。その中には、乾隆三十三年（一七六八）から三年間にわたり左遷されていた烏魯木齊やその周辺で得た八十三話が収められており、砂漠の広がる辺境地帯に城郭を築き、井戸を掘っていた様子や西域ならではの珍しい風景などが主に記されている。また、許しを得て都へと戻る際に記した「烏魯木齊雜詩」百六十首が『紀文達公遺集』に

収録されている<sup>2)</sup>。本稿は、実際に紀昀が見聞した話と詩を併せて読んでいくことにより、当時都市化しつつあった西域の変化の様子や、生活していた人々の姿をより具体的に探ろうとするものである。

### 第一章 紀昀について

#### (1) 紀昀の略歴

紀昀（一七二四—一八〇五）、字は暁嵐、号は石雲、直隸献縣（現在の河北省）の人。乾隆十九年（一七五四）進士に及第し、乾隆三十三年に翰林院侍讀学士となった。しかしその年、姻戚関係にあった盧見曾の鹽政

賄賂事件で情報漏洩の罪に問われたことにより、烏魯木齊へと三年間流謫された<sup>3)</sup>。三十六年に赦されて翰林院編修に復帰し、二年後には『四庫全書』の総編修官に任命された。その後、内閣学士兼礼部侍郎の官に就き、晩年は兵部尚書、左都御史、礼部尚書などを務めた。礼部尚書協辦大学士の官にあった嘉慶十年、八十二歳で没した。

『閱微草堂筆記』の他に、孫の樹馨<sup>4)</sup>が遺稿を集めて編修した『紀文達公遺集』(文十六卷・詩十六卷)や『文心雕龍評本』、元の方回の詩論について記した『瀛奎律髓刊誤』などの著作がある。

## (2) 『閱微草堂筆記』について

五度にわたりまとめられたものを、嘉慶五年(一八〇〇)門人の盛時彦<sup>5)</sup>により『閱微草堂筆記』全五種として刊行された。その巻数と成立年度は次のようである。

「灤陽消夏録」六卷	乾隆五十四年(一七八九)
「如是我聞」四卷	乾隆五十六年(一七九一)
「槐西雜志」四卷	乾隆五十七年(一七九二)
「姑妄聽之」四卷	乾隆五十八年(一七九三)
「灤陽續録」六卷	嘉慶三年(一七九八)

紀昀はこれら五種全てに自序を付し、「灤陽消夏録」の序文には執筆の動機が記されている。

乾隆己酉夏、以編排秘籍、于役灤陽。時校理久竟、特督視官吏題籤度架而已。昼長無事、追録見聞、憶及即書、都無体例。小説稗官、知無関於著述、街談巷議、或有益於勸懲。聊付抄胥存之、命曰《灤陽消夏録》云爾。

(乾隆己酉(一七八九)の夏、宮中の図書を整理するために、灤陽に遣わされた。その時には校訂の作業はずっと前に終わっていて、役人が書名を記して書架へと取めるのを監督するだけだった。昼間は長く仕事も無く、見聞したことを追って書き記し、思い出せばすぐに筆をとったものばかりであるので、体系立てて書いてはいない。小説や野史のようなものは、著述とは言えないことは理解しているが、街角や路地裏での世間話であっても、もしかしたら勸善懲惡に役立つことがあるかも知れない。しばらく書記に預けて保管してもらおうことにしておき、「灤陽消夏録」と名付けたのである。)

また「書灤陽消夏録後」(「灤陽消夏録」を書した後・『紀文達公遺集』卷十)には「灤陽消夏録」を刊行した後の感慨が述べられている。七言絶句二首の第一首を挙げる。

半生心力坐消磨 半生 心力 坐ろに消磨す  
紙上煙雲過眼多 紙上 煙雲 眼を過ぐること多し  
擬築書倉今老矣 書倉を築かんと擬するも今老いたり  
祇應說鬼似東坡 祇だ應に鬼を説くこと東坡に似るべし  
わが人生も折り返し地点をとうに過ぎ、あれこれ考える力も自ずと尽きてきた。紙の上に書かれたことをこれまで色々と読んできた。書庫を建てようと思ったがもう年老いてしまった。蘇東坡のように幽霊についての話をするしかない。

宋代の詩人である蘇軾は詩文を多く残しているが、それ以外にも『東坡志林』(五卷)や「子姑神記」など雑説に関する文を記しており<sup>6)</sup>、幽鬼や不思議な事柄についての興味があったことを示している。しかし士大夫にとってはやはり詩文が正統であり、不思議な事柄を記した小説に堂々と手を染める者は少なかった。稀代の学者であった紀昀もたとえそのような興味があったとしても、公然と示してはいない。先に挙げた序文の中でも、年老いてからの余暇に見聞してきたことを書き綴ったに過ぎない、と述べている。また、『閱微草堂筆記』は緊縮した古文体で記され、また史実の助けとなるよう話の出所を明記し、話に対する作者の考えを的確に述べていることが特徴の一つと言われる<sup>7)</sup>。些細な記述であっても、見聞したままに記すという姿勢が、『閱微草堂筆記』や「烏魯木齊雜詩」にも表れているように思われる。

## 第二章 「烏魯木齊雜詩」

烏魯木齊は天山山脈が南に走り、降水量も多く水も豊富な地域であるため農業も盛んに行われている(図①)。また古来より貿易の要地としても栄えてきた。三十歳で進士に及第して以降、順調に出世の道を歩んできた紀昀にとって、烏魯木齊への突然の左遷はどのような影響をもたらしたのだろうか。本章では都への帰還の際に書かれたとされる「烏魯木齊雜詩」百六十首について取り上げてみたい。それらには農耕、食べ物、地形、気候、そして街の発展の様子など様々な内容が描かれており、西域独特の文化や風習について知ることができる。またそれぞれの詩には、紀昀独自の着眼点から記された詳しい自注が付されており、詩と併せて読むことで更にイメージが膨らむものとなっている<sup>8)</sup>。



図1 烏魯木齊周辺地図

### (1) 序文について

「烏魯木齊雜詩」に付された序文には次のように記されている。

余謫烏魯木齊，凡二載，鞅掌簿書，未遑吟詠。庚寅十二月，恩命賜環。辛卯二月，治裝東歸。時雪消泥濘，必夜深地凍而後行。旅館孤居。晝長多暇，乃追述風土，兼叙舊遊。自巴里坤至哈密，得詩一百六十首，意到輒書，無復詮次，因命曰烏魯木齊雜詩。夫烏魯木齊，初西蕃一小部耳。神武者定以來，休養生聚，僅十餘年。而民物之蕃衍豐饒，至於如此。此實一統之極盛。昔柳宗元有言，思報國恩，惟有文章。余雖罪廢之餘，嘗叨預承明之著作。歌詠休明，乃其舊職。今親履邊塞，纂綴見聞，將欲俾寰海外內，咸知聖天子威德邇隆，開闢絕徼，龍沙蔥雪，古來聲教不及者，今已爲耕鑿絃誦之鄉，歌舞遊冶之地。用以昭示無極，實所至願。不但燈前酒下，供友朋之談助已也。

（私は烏魯木齊に左遷され、およそ二年間役所の文書などを管理する役職に就いていたので、ゆっくりと詩を吟じる暇もなかった。庚寅十二月（一七七〇）、天子からの恩赦により都へ帰ることとなった。辛卯二月（一七七一）、荷物をまとめて東のかた都へと帰ることとなった。その時雪は溶けてぬかるみとなっていたので、夜も更けて地面が凍った後に旅をした。一人で宿に泊まっていた間、昼が長く暇な時間が多いので、そこで見聞した風俗や習慣などを思い出して書き、併せて昔訪れた場所についても記した。巴里坤から哈密に至るまでに詩一百六十首を作ったから、何か思いつくことがあれば書き、またそれらを順序立てて整理してはいないので、そこで「烏魯木齊雜詩」と名前を付けた。そもそも烏魯木齊は、元々西域の一地域に過ぎなかった。優れた武徳をお持ちである天子がその地へ到達されて以降、人民や兵力を休め養うことが十数年

ほどの間でなされた。この様に人民や万物が遍く繁榮し、豊かな状態となったのは、これは実に天下の統一が極めて盛んになされているということである。以前柳宗元は「国恩に報いたいと思えば、ただ文章によって行っただけである」と述べた。私は罪によって官職を退いた後ではあるが、昔は忝なくも朝廷の著作を預かっていた。詩に天子の徳が立派で明らかな様を詠うのが、以前の役目であったのだ。今自ら国境の果て近くまで足を踏み入れ、見聞したことを集めて書き記し、そうすることで広く国内外に、優れた天子の素晴らしい徳がまことに盛んで、遠く離れた土地を開拓され、龍沙や蔥雪のような所は大昔から天子の権勢や教化が届かないような場所であったが、今日では農耕が行われ詩を吟じ天子の徳行を称え皆が喜び祭りをを行う場所となっている、という様子を遍く知らせたいと思ったのである。果てなくはっきり示すこと、それが私の願いである。ただ灯をともして酒を用意し、友人達で語り合う時の話の種とするというものではないのだ。）

乾隆帝に読まれることを意識しているため、その功績を称賛する文章となっていることは否めない。しかし「耕鑿絃誦の郷、歌舞遊冶の地と爲る」と述べ、もともと龍沙や蔥雪のように砂漠に覆われた土地に過ぎなかった場所が、清朝後期にはすっかり開墾され、都市としての基盤が整備されつつあったことが窺えるのである。詩にもその発展している街の様子が詠われており、都から遙か離れた烏魯木齊で実際に生活した者ならではの視点で記されている。

### (2) 詩に詠われた内容

今回底本とした嘉慶十七年刊の『紀文達公遺集』（巻十四）所収「烏魯木齊雜詩」（以下「嘉慶本」とする）と『百部叢書』（「借月山房彙鈔」清代嘉慶張海鴻輯刊）所収の「烏魯木齊雜詩」（以下「百部叢書本」とする）を確認したところ、多少の異同があることがわかった。嘉慶本は『續修四庫全書』（集部・別集類所収）の底本ともなっており、紀昀の序文の後に百六十首が並んでいる。また末尾に錢大昕の跋文が載せられている。両書を比較してみると、嘉慶本では詩は内容別に整理して並べられてはいないが、一方で百部叢書本では風土二十三首、典制十首、民俗三十八首、物産六十七首、遊覧十七首、神異五首の六種に整理されていることが大きく違う点の一つとして挙げられる<sup>9)</sup>。

では具体的な詩の内容について見ていきたい。

#### ① 街の発展の様子

乾隆三十三年に紀昀が着任する以前の烏魯木齊の状況

について、『清史稿』卷七十六「地理志」（新疆迪化府）には次のように記されている。

乾隆二十年，平準噶爾，始内属，名烏魯木齊，築土城。二十五年，設同知。二十八年，築新城於其北，名迪化。

（乾隆二十年（一七五五），ジュンガルを平定し，初めて中国の属地として，名を烏魯木齊と改め，土城を築いた。二十五年（一七六〇）同知の官を置いた。二十八年（一七六三）新城をその北に築き，迪化と名付けた。）

当初，「土城」は街の北西にある九家湾のあたりに建てられていたが，その八年後には現在の自治区政府がある烏魯木齊河の右岸へと遷った<sup>10)</sup>。紀昀はその当時の景観を「烏魯木齊雜詩」第一首に詠んでいる。

山園芳草翠煙平 山 芳草を圍み 翠煙平らかなり  
迢遰新城接舊城 迢遰たる新城 舊城に接す  
行到叢祠歌舞榭 行きて叢祠の歌舞榭に到り  
緑氍毹上看棋枰 緑氍毹上 棋枰を見る

山々はよい香りの草に囲まれ，青い霞が平らにたなびいている。遠くに見える新しく建てられた迪化城は，昔の城の隣にある。歩いていくと，草むらの中の廟にある歌舞臺に着いた。緑色の毛氍毹をひいたような山の上から，碁盤のように走る街並みを見渡す。

城舊ト東山之麓觀，御史議移今處以就水泉。故地勢頗卑。登城北關帝廟劇樓，城市皆俯視歷歷。城は舊と東山の麓觀をトし，御史今處に移し以て水泉に就くを議る。故に地勢頗る卑し。城北の關帝廟の劇樓に登れば，城市皆な俯視するに歴歷たり。

（城は元々東山の美しい景観を選んで作られ，御史たちが今の場所に移し，水源に近くなるようにと相談した。そこでその地勢はととても低い。城の北にある関帝廟の劇樓に登ってみると，街の様子をはっきりと見渡すことができる。）

旧城と迪化城は互いに接するようにして建てられ，また街並みの様子は「棋枰」と表現されている。この当時すでに都市としての景観が整いつつあったことが窺える。これについて「如是我聞」（二）第一六条の中では以下のように記されている。

後烏魯木齊築城時，鑑伊犁之無水，乃卜地通津以就流水。…然或雪消水漲，則南門爲之不開。又北山支麓，逼近譙樓，登岡頂関帝祠戲樓，則城中纖微皆見。  
（その後烏魯木齊で城を築いた時，伊犁には水が無いことを教訓にし，そこで四方に水が豊富にある所を選んで川の流れに近づけた。…しかし雪が溶けて水がいっぱいになれば，南門が開かなくなってしまう。ま

た北の山の枝分かれした辺りは物見やぐらにととても近く，岡の頂上にある関帝廟の戲樓に登れば，城内が細部までみな見渡せる。）

烏魯木齊の街の中心を流れる烏魯木齊河は，人々の生活や農耕にとって大切な水源であった。築城にあたって，まず灌漑をきちんと行うことによって街が整備されていき，その後の発展へと繋がっていった様子が描かれている。また烏魯木齊を表す「迪化」という名称は，土地の言葉では「紅廟兒」とも言うが，それについて第十四首では次のように詠われている。

雙城夾峙萬山圍 雙城夾峙し 萬山圍む  
舊號雖存舊址非 舊號 存すと雖も舊址は非なり  
孤木地旁秋草沒 孤木地の旁 秋草没し  
降蕃指點尚依稀 降蕃 指點するも 尚お依稀たり

二つの城が左右にそびえ立ち，山々がそれを囲っている。昔からの呼び名が残っているが，もとの城の場所とは違っている。（旧城のあった）孤木地のあたりは秋の草に埋もれている。降伏した蕃族が指さすが（今では）はっきりとは分からない。

烏魯木齊舊地在今城北四五十里，約近孤木地，屯額魯特人能道之。今地俗稱紅廟，廟址在舊城之東，不知何代之廟。因以名地，亦不知始於何人也。

烏魯木齊の舊地は今の城北四五十里に在り，約孤木地に近く，額魯特に屯するの人能く之を道す。今地は俗に紅廟と稱し，廟址は舊城の東に在り，何代の廟なるかを知らず。因りて以て地に名づくるも，亦た何人に始まるかを知らざるなり。

（烏魯木齊の昔の場所は今の城から北へ四，五十里ほどの所にあり，ほぼ孤木地に近く，額魯特に駐屯する人たちはその場所を言うことができた。土地の人々は「紅廟」と言い，廟のもとの場所は旧城の東に位置しており，いつの時代に建てられた廟なのかかわからない。そこでその地に名付けたのも，誰から始まったのかも不明である。）

白須氏によれば，「紅廟」という名前の由来は関帝廟の紅い廟宇にあるという<sup>11)</sup>。土地の人々の間では既にその名が浸透しており，古くから人々の信仰をあつめていたことがわかる。また都市の発展には，人材を育てるための教育の整備も重要な要素であると思われるが，第六五首には学校や私塾が開かれていた様子が詠われている。

芹香新染子衿青 芹香新たに染む子衿の青  
處處多開問字亭 處處多く開く 問字の亭  
玉帳人間金柝靜 玉帳 人間 金柝静かなり  
衙官部曲亦横經 衙官の部曲も亦た經を横たう

学校は新しく青い服を着た学生でいっぱいになり，あちこちで教えを授ける塾が開かれている。軍營のとばりが張られた城内では，銅鑼や拍子木

を打つ音も静かである。軍隊の兵士たちも書物を横に並べて勉強している。

廸化、寧邊、景化、阜康四城、舊置書院。四處自建學額以來、各屯多開鄉塾。營伍亦建義學二處、教兵丁之子弟、絃誦相聞儼然中土。

廸化、寧邊、景化、阜康の四城、舊と書院を置く。四處に學額を建設して自り以來、各屯は多く郷塾を開く。營伍も亦た義學二處を建てて、兵丁の子弟を教え、絃誦の相い聞こゆるは儼然として中土のごとし。

（廸化、寧邊、景化、阜康の四城には、もともと書院が置かれていた。この四か所には科挙に応ずるための定員を設けてから、それぞれの村では多く郷塾が開かれた。軍隊も二カ所に無償の学校を建てて、兵士の子供達を教えており、詩を暗唱している声が聞こえる様子はまるで中国内地のようである。）

軍部が主体となって学校を建て、武官の子供たちが教育を受けていたことは、第四二首の注にも「土俗以卒伍爲正途、以千總把總爲甲族。自立學校、始解讀書。（土俗では卒伍の階級を正式なものとし、千總・把總<sup>12)</sup>といった低い階級を有力な家柄とした。学校ができてから、はじめて書物を読んで勉強した。）と記されている。また日野強氏の『伊犁紀行』には、「けだし回部には、古來学校の設置ありて、おおよそ男子六七歳にいたれば、ここに入れて教育を託したり。」<sup>13)</sup>とあることから、書物を読み勉強する環境が整っていたことが窺える。そして教育の普及に伴い、街にも変化が見られた様子が、第六二首の注に書かれている。

初塞外無鬻書之肆、問有傳奇小説。皆西商雜他貨偶販。至自建置學額以後、遂有專鬻書籍者。

（初め辺境の地には書物を売る店はなく、たまに伝奇小説があるくらいだった。それらはみな西から来る商人が他の商品と一緒にたまたま売りに来ていただけであった。学校が設置されてからは、ようやく書物を専門的に売る人ができた。）

以前は書物と言っても経書のようなものは手に入らず、娯楽として読まれる伝奇小説の類が売られているだけだったようだ。この詩の第四句には「儒書今 幹難河を過ぐ」（儒学の書物は今、幹難河（黒龍江の上流）を過ってやって来る）とあり<sup>14)</sup>、学問の基本書がようやく流入しつつあったことがわかる。しかし古来よりこの地は文化的に遅れていたというわけではなく、かつて中国の王朝に仕えた人も多くいた。紀昀と同年の進士である錢大昕<sup>15)</sup>による「烏魯木齊雜詩」の後跋にはこう記されている。

獨怪元之盛時、畏吾人仕於中朝者最多、若廉善甫父子、貫酸齋、楔玉立兄弟、并以文學稱。

（ただ不思議に思われるのは、元が栄えていた時、畏吾（ウイグル）の人で中国の王朝に仕えた人は最も多く、廉善甫父子、貫酸齋、楔玉立兄弟のように、文学によっても評判となった人たちがいた。）

廉善甫は名を希憲といい、『元史』（卷一二六）の記述によれば、幼い頃より経書や史書を好む優秀な人物で、世宗に寵愛を受けていたようだ。また息子達六人も役人となって仕えた官吏一家であった。貫酸齋は本名を小雲石海涯といい、『元史』（卷一四三）に伝がある。書物を読み、狩りも得意で、父の跡を継ぎ兩淮萬戸府達魯花赤の官に就いた。「達魯花赤」とは蒙古語で長官を指す<sup>16)</sup>。そして楔玉立の父である楔文質は、吉安路達魯花赤となり礼部尚書の官をおくられた人で、その息子達五人はみな進士に合格した。『元史』（卷一九三）の伝には「一門世科之盛、當時所希有、君子蓋以爲其忠義之報云。」（一家が代々科挙に受かった栄華は、当時は非常に珍しいことで、君子はおそらくその忠義な報いであろうと言った）とある。このように、ウイグルの地域からは昔から優秀な人材を多く輩出していたが、清朝の支配下に置かれて交易も更に活発化していったことにより、内地と変わらぬ環境が整いつつあったのだろう。

## ② 交流の活発化

上述のように、城内の景観の整備や教育設備の発展など、都市として機能していくための基盤が徐々に出来つつあった烏魯木齊では、人々の往来も自由になされていた。その様子が詠われている詩を挙げてみたい。

吐蕃部落久相親 吐蕃の部落 久しく相い親しみ  
賣果時時到市闐 果を賣り時時 市闐に至る  
恰似春深梁上燕 恰も春深き梁上の燕の  
自來自去不關人 自ら來たりて自ら去り人に關せざるが似し

吐蕃の集落は、長い間中国内地とも親しく、果物売りがいつも市場の門にやってくる。まるで春も深まり梁の上にやどる燕が、やってきてはまた出て行き、人と関係なく己の営みを行っているかのような。

吐魯蕃久已内属、與土人無異。往来貿易、不復稽防。吐魯蕃久しく已に内に属し、土人と異なる無し。往来して貿易し、復た稽防せず。

（吐魯蕃はもう長い間中国の属地で、代々住んでいる人たちと変わらないほどだ。行き来しあい盛んに貿易が行われ、一々調べることもない。）

烏魯木齊の南に位置する吐魯蕃（トルファン）は、漢代には高昌国が建てられ、唐の太宗の世であった貞観十四年（六四〇）には安西都護府が置かれるなど<sup>17)</sup>、古

来より交通の要地としても発展してきた。商人達が自由に行き来し、交流が盛んであった様子はこの第六九首の他、第六八、七〇首にも描かれている。それらによれば、モンゴルからの商人達のグループは「北套」と呼ばれ、現在のフフホトにあたる帰化城から烏魯木齊へは約二ヶ月かけてやってくると記されている<sup>18)</sup>。また、果物以外にも西域では珍しい食材である魚や海鮮などを携えて行商にやって来て、それらを買い求める様子が詠われている。第一〇九首を挙げる。

不重山看重海鮮 山肴を重んぜず 海鮮を重んず  
北商一到早相傳 北商一たび到らば早に相い傳う  
蟹黄蝦汁銀魚鯊 蟹黄 蝦汁 銀魚の鯊  
行篋新開不計錢 行篋 新たに開くに錢を計らず

ここでは山のご馳走よりも海鮮のほうが珍重される。北からの商人がやってくると、すぐにその情報は伝わる。蟹味噌や蝦のスープ、白魚の干物。行商の箱が開けば、金に糸目はつけない。

一切海鮮皆由京販至歸化城，北套客轉販而至。所謂銀魚，即衛河麩條魚也。

一切の海鮮皆な京より販して歸化城に至り，北套の客轉販して至る。所謂銀魚は，即ち衛河の麩條魚なり。

(あらゆる海鮮物は都を経由して帰化城へと運ばれ，モンゴルの商人達がそれをこちらに運んでくる。銀魚と呼ばれる魚は，衛河の面条魚である。)

詩に描かれている銀魚という平たく細長い白魚は美味とされたようだ。紀昀は果物や魚以外にも、肉や野菜、酒などを楽しんでおり、その様子が他の詩の中で詠われている<sup>19)</sup>。また、内地の食べ物を思い出して作った詩もあり、左遷生活のなかで食べ物にも強く郷愁を覚えていたことがわかる。

以上のように、紀昀は烏魯木齊で役人として、また生活を送る住民としての日々の中で興味を覚えた事柄を、外部から来た人間であるからこそ気づくことのできる視点に立って、詩に書いたことがわかる。為政者側の視点ではあるが、烏魯木齊が都市としての基盤を固めつつあった様子や、交易の中心地として人々や品物も多く流入し賑わいをみせていたことが描かれている。正式な史実としては残らないような些細な記述ではあるけれど、現地で生きる人々の素朴な日常や、当時の暮らしの風景を生き生きと伝えるものとなっているのではないだろうか。

### 第三章『閱微草堂筆記』の中の烏魯木齊

『閱微草堂筆記』の中で、烏魯木齊やその周辺で見聞したことについて関連するものは八十三話確認できる。西域特有の風習や、また築城や土地の開墾の際に起こっ

た出来事などが主な題材として用いられていることは、これまで見てきた詩の内容とも共通している。「姑妄聽之(二)」第四九条の中では「烏魯木齊雜詩」を書いた時の様子に言及している。

余從軍西域時，草奏草檄，日不暇給，遂不復吟詠。或得一聯一句，亦境過輒忘。烏魯木齊雜詩百六十首，皆歸途追憶而成，非当日作也。…

(私が西域に従軍していた時には、上奏文や檄文を作成することに毎日忙しく、とうとう詩を吟ずることもなかった。たまに一聯や一句が思い浮かんでも、その場を過ぎるとすぐに忘れてしまう。『烏魯木齊雜詩』百六十首は、すべて帰途に思い出しながら作ったもので、そのつど書いていたものではない。…(後略))

「灤陽消夏録」の序は「烏魯木齊雜詩」から約二十年の歳月を経て書かれた。しかし烏魯木齊で過ごした約三年間は老年にさしかかった紀昀にとっても忘れられない経験であったことだろう。その体験が彼のその後の著述にも影響しているように思われる。本章では『閱微草堂筆記』において烏魯木齊や新疆の様子がどのように描写されているのかをみていきたい。まず烏魯木齊の食べ物や風習について記した話として「姑妄聽之(一)」第十六条を挙げる。

西域之果，蒲桃莫盛于土魯蕃，瓜莫盛于哈密。蒲桃京師貴綠者，取其色耳。實則綠色乃微熟，不能甚甘。漸熟則黃，再熟則紅，熟十分則紫，甘亦十分矣。此福松岩額駙(名福增格，怡府婿也。)鎮辟展時爲余言。瓜則充貢品者，眞出哈密。饋贈之瓜，皆金塔寺產。然貢品亦只熟至六分有奇。途間封閉包束，瓜氣自相郁蒸，至京可熟至八分。如以熟八九分者貯運，則蒸而霉爛矣。…

(西域の果物は、蒲桃(ブドウ)は土魯蕃産の物が最も有名で、瓜は哈密産の物が最も有名である。蒲桃は都では緑色の品物が貴ばれるのは、その色が綺麗だからにすぎない。実際は緑色のもはまだ熟れ初めで、十分に甘いとは言えない。だんだん熟れていくと黄色になり、更に熟れると赤く、十分に熟れると紫色になり、それが一番甘みも強い。これは福松岩額駙(名は福増格、怡府の婿である)が辟展(トルファン)を治めていた時に私に話してくれたことである。瓜は貢ぎ物として用いるなら、やはり哈密の物が一番である。贈り物にされるのは、金塔寺産の瓜である。しかし貢ぎ物としては六分ほど熟れているものを使うほうがいい。道中しっかりと包装されている

ため、瓜の気は自ら蒸されていき、都に着く頃には八分ほどまで熟れている。もし八、九分まで熟れたものを運ぶとなれば蒸れてしまい、カビが生えて腐ってしまうのである。）

都と産地では好まれる色や完熟度も異なっていると記されており、地域の差がわかり興味深い。現代においてもトルファンのブドウやハミの瓜は、この地域を代表する果物として有名であり日常的に食されている<sup>20)</sup>。「烏魯木齊雑詩」の中でも瓜について詠んだ詩があり、場には紀昀もそのみずみずしい甘さや冷たさを好み、よく食べていたことが述べられている<sup>21)</sup>。

しかしこのように西域の風習について具体的に記した話や、第二章でも取り上げたような、都市の発展について描かれているものは『閩微草堂筆記』においては少なく、むしろ烏魯木齊の周辺に住む人々や役人仲間から聞いた、不思議な出来事や幽鬼や化け物についての話が題材として多く取られているのである。一方で、「烏魯木齊雑詩」の中で不思議なことについて詠んでいるものは第一五五～一六〇首の六首だけであり、全体的に見れば少ない。この六首には『閩微草堂筆記』の中で引用されている詩もある。まずは、第二章でも触れた「紅廟」へ定期的に現れる不思議な馬について書かれた「灤陽消夏録」(三) 第三条を挙げてみたい。

烏魯木齊關帝祠有馬，市賈所施以供神者也。嘗自嚼草山林中，不歸皂櫪。每至朔望祭神，必味爽先立祠門外，屹如泥塑。所立之地，不失尺寸。遇月小建，其來亦不失期。祭畢，仍莫知所往。余謂道士先引至祠外，神其說耳。庚寅二月朔，余到祠稍早，實見其由雪積緩步而來，弭耳竟立祠門外。雪中絕無人跡，是亦奇矣。

(烏魯木齊の關帝廟に馬がいて、商人が置いて神に祭ったものだった。以前馬が自分で山林へ草を食べに行ったまま、馬小屋に帰ってこなかった。いつも陰曆一日と十五日に神を祭る時になれば、必ず夜明け頃に先に廟門の外で、まるで泥人形のように立ちつくしていた。立っていた場所は、一尺一寸も違わなかった。毎月二十九日にもやって来て、間違うこともなかった。祭祀が終わると、もうどこへ行ったか分からなくなっているのである。私は道士が前もって引いて廟の外へ連れて行っているのだろう、なんとも不思議な話だと思っていた。庚寅（一七七〇）二月末日、私は廟に少し早めに行くと、本当にその馬が雪道の中をゆっくりと歩いてきて、従順に廟門の外で立つのを見た。雪の中にはまったく人の形跡もなく、不思議なことであった。)

この不思議な馬について紀昀は実際に自分で確かめたと書かれており、強く興味を抱いていたことがわかる。この話と関連している第一五五首には次のように詠われている。

靈光盼嚮到西陲 靈光盼嚮して西陲に到る  
齊拜城南壯繆祠 齊しく城南の壯繆祠を拜す  
神馬驍騰曾眼見 神馬驍騰曾て眼のあたりに見る  
人間銜勒果難施 人間の銜勒 果たして施し難し

靈妙な光が四方に広がり、西の辺りまで射している。人々はみな城の南にある関帝廟を参拝する。不思議で勇壮な馬を目の当たりにした。俗世の轡などどうしてつけることができるだろうか？

初民間有馬不受韁。施於廟中，充神馬。乃馴順殊常，然非爲神立仗，仍不可銜勒也。散行街市，未曾妄齧寸草，或遊行各牧場中，皆以其來爲喜。每朔望輒自返廟中，尤爲可異云。初め民間に馬の韁を受けざる有り。廟中に施され、神馬に充つ。乃ち馴順なること常と殊なるも、然れども神の爲に立仗するに非ざれば、仍ち銜勒すべからざるなり。街市を散行し、未だ曾て妄りに寸草を齧らず、或いは各牧場中に遊行するも、皆な其の來たるを以て喜びと爲す。朔望ごとに輒ち自ら廟中に返るは、尤も異しむべきと爲すと云う。(最初民間に轡も着けさせない馬がいた。廟の中におかれていて、神馬とした。おとなしく馴れている様子が普通とは違い、神のために儀仗のように立つのでなければ、轡を着けさせないのであった。街をのんびり歩いても、草を適当に食べたりすることもなく、また牧場の中を遊びに行くと、みなその馬が来たことを喜んでいた。毎月一日と十五日になると自分で廟の中に戻っていくのは、なんとも不思議なことである。)

その馬を自ら目の当たりにし、不思議さに感嘆した様子が記されている。だが先に挙げたように、「灤陽消夏録」の中で再度記された時には、その様子がより具体的に記されていることがわかる。著者自身で確認したことであり、信憑性があるということ強調したいという思いが表れているように思われる。ここにも紀昀の見聞したままに記すという姿勢をかいま見ることが出来るのではないだろうか。

次に、第一五九首と関連する「灤陽消夏録」(三) 第十八条を挙げる。

昌吉築城時，掘土至五尺餘，得紅紵絲綉花女鞋一，制作精緻。尚未全朽。余烏魯木齊雜詩曰，「築城掘土土深深，邪許相呼万杵音。怪事一聲齊注目，半鉤新月蘚花侵。」咏此事也。入土至五尺餘，至近亦須數十年，何以不壞？額魯特女子不纏足，何以得作弓彎樣，僅三寸許？此必有其故，今不得知矣。

(昌吉に城を築いていた時、土を五尺ほど掘り返したところ、赤い刺繍の施された女の子の靴が一

足出てきた。その作りはとても精巧でまだ全て朽ち果ててはいなかった。私は「烏魯木齊雜詩」にこう詩を作った。「築城して土を深く掘り、よいしょと声を掛け合って杵の音を立てる。「おや不思議だぞ」という一声にみな注目してみると、苔がむした三日月のような形をした小さな靴があった。」この出来事を詠んだものである。五尺ほどの深さの土中に埋まっていて、今まできつと数十年もそこにあったのに、どうして壊れてはいないのだろうか？額魯特の女子は纏足する習慣がないはずだが、なぜ弓なりの形で、たった三寸ほどの小さな靴の形をしているのだろうか。これにはきつと何か理由があるのだろうか、今ではわからない。）

第一五九首にはこのこと同じ詩が記載され、その自注には次のように記されている。

昌吉築城之時、掘土數尺、忽得弓鞋一彎、尚未全朽。額魯特地初入版圖、何緣有此、此真不可理解也。

（昌吉に城を築いていたとき、土を数尺掘りかえすと、突然弓なりの形をした鞋が出てきて、まだ朽ち果てていなかった。額魯特の地は最近領土となったばかりなのに、どうしてこのようなものがあるのか、これは本当に分からないことである。）

額魯特はオイラトを指し、モンゴルの一族である。昌吉は烏魯木齊の北にあり、乾隆二十七年（一七六二）、昌吉河の近くに寧辺城が建てられた<sup>22)</sup>。中国内地に特有の纏足という風習が、この地で何故見られたのだろうか。『伊犁紀行』の蒙古族の服装について記した部分の「履物は、男女ともに柔革をもって製したる長靴をうがてり。」<sup>23)</sup>という記述からも、この地域の女性に纏足の習慣があった様子はみられない。また第一五七首では、同じく昌吉の築城の際に、土の中から掘り出された瓶の中にまだ食べられそうな小麦粉が入っていたことについて詠われている<sup>24)</sup>。その小麦は浜辺に生えるもので、昌吉では手に入らないはずなのに、どうして土の中に埋まっていたのだろうか、とその不思議さを詩に記している。

そして、「烏魯木齊雜詩」の最後を飾る第一六〇首と関連する「槐西雜志」(三) 第七四条を挙げる。

《列子》謂蕉鹿之夢、非黃帝孔子不能知。諒哉斯言。余在西域、從辦事大臣巴公履視軍臺。巴公先歸、余以未了事暫留、與前副將梁君同宿。二鼓有急遞、臺兵皆差出、余從睡中呼梁起、令其馳送、約至

中途遇臺兵則使接遞。梁去十餘里、相遇即還、仍復酣寢。次日、告余曰「昨夢公遣我賚廷寄、恐誤時刻、鞭馬狂奔。今日髀肉尚作楚。眞大奇事。」以眞爲夢、僕隸皆粲然。余烏魯木齊雜詩曰「一笑揮鞭馬似飛、夢中馳去夢中歸。人生事事無痕過（東坡詩：事如春夢了無痕。）蕉鹿何須問是非。」即紀此事也。

（『列子』には、夢か現実かの区別は黄帝や孔子でなければわからないだろう、とある<sup>25)</sup>。その言葉は本当だ。私は西域にいた時、軍事長官の巴公に従って軍台を視察した。巴公は先に帰られたが、私はまだ仕事が残っていたので暫くそこに留まることにし、前の副將の梁くんと一緒に宿へ泊まった。夜十時過ぎに急ぎの伝達がやって来たが、軍台の兵士たちはみな仕事で出かけており、私は寝ていた梁を呼んで起こし、彼に急いで行って、途中で軍台の兵士に会ったらそれにまた伝えて行かせるよう言いつけた。梁は十何里か行ったところで、兵士と落ち合ったので戻ってきて、また帰って寝た。次の日、私にこう話した。「昨夜夢で公に伝達するよう仰せつかったので、時刻に遅れてはと心配し、馬にむち打って慌てて飛んでいきました。今日は太ももが筋肉痛ですよ。本当に不思議なことです！」本当にあったことを夢だと思っており、僕や召使いたちはどっと笑った。私は「烏魯木齊雜詩」に「鞭を揮って、馬は飛ぶように速く走り、夢の中を馳せていき、夢の中から帰ってきたことに大笑いした。人生の色々な出来事は跡形もなく過ぎていく。人生の得失ははかないものであるのにどうしてその是非を問うたりすることがあろうか。（蘇東坡の詩に「物事は春の夢のように終わっていき、跡形もない」とある<sup>26)</sup>）」と詠んだのは、この出来事を記したものである。（後略）

この後、夢の中での出来事を実際に起きたものと勘違いした人の話も加えて載せている。第一六〇首は詩も自注もほぼ同じである。烏魯木齊の提督である巴彥弼<sup>27)</sup>の下について従軍していた紀昀の様子が窺える。そのような日々の中でのたわいもない出来事を記した詩ではあるが、「人生事事痕無く過ぎ、蕉鹿何ぞ須く是非を問わんや」と詠い、まるで烏魯木齊で過ごした日々を振り返っているかのようにも思われる。八十二年という生涯においては、まるで夢のように過ぎ去った二年間あまりで、彼の中では左遷という不本意な出来事であったかもしれない。しかしながら、また得るものも多く、見聞を広めることとなった歲月だったのではないだろうか。先に引用した錢大昕の後跋の末尾にはこう記されている。



而又得之目擊，異乎傳聞影響之談，它日采風謡，志興地者，將于斯乎徵信，夫豈與尋常牽綴土風者同日而道哉。

（そしてまたこの詩は実際に目にして書かれているので、人から聞いて根拠もないような話のものとは違っている。将来土地の歌謡を採録し、地理について書き記す者はこの詩を根拠とすることだろう。どうして単にその土地の珍しい風俗を目立たせるようにして書いたような平凡なものと同じように取り上げることなどできるだろうか。）

平凡な日常の中に、人生の面白さを感じさせるような不思議な出来事の断片があり、それらを簡潔に描いたものは、後々になれば貴重な記録と為りうることもある。そしてそのように記すにはやはり優れた観察眼と筆力が必要であり、それらが備わっていないものはただの雑記として見なされてしまうであろう。この第一六〇首は「烏魯木齊雜詩」をしめくくる意味でも見逃すことはできないと思われる。

## おわりに

以上のように、紀昀の「烏魯木齊雜詩」と『閱微草堂筆記』を中心に取り上げ、清朝乾隆期における西域の様子をどのように記されているかについて考察してきた。烏魯木齊は、地理的条件にも恵まれていたこともあり昔から独自の文化をもっていたものの、都から見れば遥か遠く離れた流刑地に過ぎなかった。しかし清朝乾隆期に入り中国に帰属して以降は、都市としてさらに発展していく為の基盤を築きつつあった。ちょうどその最中に滞在していた紀昀の記述からは、当時の風景や人々の生活の雰囲気を感じることができる。具体的に内容を見ていくと、詩の中では、左遷されたことへの嘆きや境遇の辛さなどの心情について詠うのではなく、農耕を行う人々の姿や季節ごとの祭祀、演劇を楽しむ様子、また街が整備されつつあり人々の交流も盛んであった様子など、現地の生活の中で見聞した出来事をそのままに描き出そうとしていることが分かった。その一方で、『閱微草堂筆記』の中では不思議で珍しい出来事を記すことの方に重点があり、具体的な西域の街の様子などを題材として描かれることは少ない。

両者とも正式な史書には記されないような、とるに足らない日常の一場面を切り取っているが、むしろその断片にこそ当時のありのままの姿が描写されていると言えるのではないだろうか。七言絶句という形式によって、見聞したことを全て記すことには制限があるかもしれないが、その点は自注により補足されている。そして「烏

魯木齊雜詩」と『閱微草堂筆記』に共通する特徴として、記録者としての紀昀の姿があるといえる。その記録するという行為は、若い頃には正統な表現方法である詩という形式を用い、また年老いてからは筆記という形をとることで、さらに題材の対象を広げることとなった。

都市として発展していく最中にあり、活気に満ち溢れていた辺境の土地で過ごした様々な体験が、その後の紀昀の文学世界を更に広げることへと繋がっていったといえるだろう。

## 注

1. 紀昀の伝記資料としては『清史稿』卷三二〇（列伝一〇七）や『清史列伝』卷二八（大臣伝三）があり、また『紀昀嵐年譜』（賀治起・呉慶栄著、書目文獻出版社、一九九三年）に詳細な事績が纏められている。
2. 「烏魯木齊雜詩」について論じたものには、周寅賓氏「春風已度玉門関－從紀昀の《烏魯木齊雜詩》談起」（『社会科学戦線』、一九八四年第一期）や崔瑩氏「從《烏魯木齊雜詩》看清代新疆少数民族民間習俗」（『新疆教育学院学报』第二二卷第四期、二〇〇六年）などがある。『閱微草堂筆記』を中心に論じたものには、呉波著『閱微草堂筆記研究』（上海古籍出版社、二〇〇五年）や、前野直彬氏『中国小説史考』（秋山書店、一九七五年）の明・清時代の小説を中心に論じた第Ⅲ節にも詳細な論考がある。日本語訳の抄訳としては、今村与志雄氏による『剪燈新話・剪燈余話・閱微草堂筆記・子不語』（平凡社、古典文学全集・一九五八年）、前野直彬氏による『閱微草堂筆記・子不語』（平凡社、古典文学大系・一九七一年）黒田真美子氏『閱微草堂筆記・子不語・続子不語』（『中国古典小説選・清代Ⅲ』明治書院、二〇〇八年）などがある。
3. 盧見曾（一六九〇－一七六八）、字、澹園、号、雅雨、德州（山東省陸縣）の人。康熙六十年（一七二一）の進士で、官職は永平府長官を経て兩淮鹽運使となる。塩商人から賄賂を受け取ったとして捕らえられた。紀昀の長女の婚である盧蔭文は見曾の孫にあたる。
4. 紀樹馨（一七七二－？）、字は香林といい、紀昀の五男汝傳の長男。刑部江西司員外郎、宣昌府知府の官に就いた。紀昀の晩年に著作の原稿を預かり、その死後編集し『紀文達公遺集』文十六卷（賦、雅頌、序、銘、傳、墓誌銘など）詩十六卷として上梓した。また紀昀には『史通削繁』『帝京景物略』などの著作もある。
5. 盛時彦は字、松雲、順天大興（北京）の人である。官は員外郎。『閱微草堂筆記』の跋文と、「姑妄聽之」の後跋を記している。
6. 「子姑神記」（『蘇軾文集』卷一三所収）は紫姑神について記したものである。また卷七二には「雜記 異事」として、仙や幽鬼にまつわる不思議な話が記されている。
7. 『閱微草堂筆記』は、『聊齋志異』と並び清代における文言小説の筆頭に挙げられる。『聊齋志異』は清代初期、蒲松齡により書かれた。狐や幽鬼、仙女などの異類と人間の男性が繰り広げる恋物語が多く収録され、唐代の伝奇小説の雰囲気をもつ一方で、六朝時代の志怪のように簡潔な筆致で記された不思議な話もある。『聊齋志異』と『閱微草堂筆記』はともに文言で書かれた小説とはいえ、両者の雰囲気は異なっており、紀昀は蒲松齡の才能を認めつつも、『聊齋志異』の文体は志怪と伝奇の二体を兼ね備えていると批判した。その経緯が盛時彦による跋文に記されている。紀昀の執筆の動機や当時の小説観については

- 前野直彬氏により既に考察がなされているため、ここでは詳しく取り上げない。前野直彬氏「明清の小説論における二つの極点－金聖嘆と紀昀－」（『中国小説史考』第Ⅲ節第四章）参照。
8. 『小方壺齋輿地叢書』第二帙（南清河王氏撰，廣文書局，一九六二年）には『烏魯木齊雜記』として注だけ抜粋したものが収録されている。
  9. 両書を比較しまとめたものを表として注の最後に記した。また、「烏魯木齊雜記」を『閔微草堂筆記』の中で引用している場合があるが、参照してみると実際にはどちらの本にも収録されていない詩がある。紀昀の勘違いによるものか、この『百部叢書』本における三首の未収録作品と同じく、他にも収録されなかった詩があったのか現段階では判断できない。
  10. 烏魯木齊の沿革と清末民初の様子については白須氏の論考に次のようにある。「一七六三年（乾隆二八年），この土城を修築し，四つの門を設置して迪化と命名した。…一七六五年（乾隆三〇年），清朝は，この土城・迪化城の北，すなわち紅山の南に新城の建設を開始し，一七六七年（乾隆三二年）に至って完成させた。」（白須淨眞氏「清末民初のウルムチ（迪化城）の景観と大谷探検隊の記録－一九八七年訪中報告（三）－」（『東洋史苑』竜大史学科東洋史学生会，一九八八年 30, 31号，p 85-87），また新免康氏「中国新疆のウルムチ（烏魯木齊）市の歴史の変遷」（『都市と環境の歴史学・第二集（特集）国際シンポジウム「東アジアの都市史と環境史－新しい世界へ」』中央大学，二〇〇九年）にも烏魯木齊の都市としての変遷についての論考がある。
  11. 注（10）「乾隆年間（一七三六－九五年）築城の現城・烏城は，烏魯木齊であり，迪化城であり，新疆省の首府であり，旧城趾の紅を塗れる廟宇に由来して紅廟子と呼ばれていた。」（p 85）
  12. 『清國行政法』第四卷には「康熙三十年初メテ歩軍統領ヲシテ巡捕三營ヲ管セシメタリ時ニ三營ニ參將三人，遊擊三人，守備十九人，千總十五人，把總三十人及兵五千一百人アリキ」とあり，また「千總（我少尉ニ相當ス）…把總（我軍曹ニ相當ス）」とある。（臨時臺灣舊慣調査會第一部報告『清國行政法』，南天書局有限公司，中華民國六十八年十一月影印，第三款「綠營」第一項「巡捕五營」p 300, 304）
  13. 日野強氏『伊犁紀行』（芙蓉書房，一九七三年，下巻第二部「地誌の部」p 123）
  14. 「山城是處有絃歌，錦帙牙籤市上多。爲報當年鄭魚仲，儒書今過翰難河。」
  15. 錢大昕（一七二八－一八〇四）字，曉徵，号，辛楣，嘉定の人。乾隆十九年の進士で，経書や史書を研究し，考証学者として名を挙げた。著作に『二十二史考異』『潜研堂全集』などがあり『清史稿』（卷四八七）に伝がある。
  16. 注（12）「其長官タル者ハ實ニ達魯花赤ナリキ（達魯花赤ハ蒙古語ニシテ物ヲ括約スルノ義ナリ）」（第老巻下，第二編「行政組織（第二）」第四章「地方官廳」，p 13）
  17. 「貞観十四年，侯君集平高昌，置西州都護府，治在西州。…仍移安西都護府理所於高昌故地。」（『舊唐書』卷四十「地理志」）
  18. 第六八首の詩注に次のようにある。「大買皆自歸化城來，土人謂之北套客。其路乃客路，蒙古人所開，自歸化至迪化，僅兩月程，但須攜鍋帳耳。」
  19. 例えば第九五首には鶏肉の味の良さについて記しており（「白草初枯野雉肥，年年珍重進形圍。傳聲貢罷分攜去，五采斑斕滿路歸。野雞脂厚，分餘歲以充貢。」），第九七首では魚料理について記している。（「昌吉新魚貫柳條，箬簍入市亂相招。蘆芽細點銀絲脰，人到松陵十四橋。秦地少魚，昌吉河七道灣，乃產之羹。以蘆芽或蒲筍，頗饒風味。」）
  20. 「甜瓜・スイカの産地は「ハミウリ」の名で知られるハミ，シャンシャン，カシュガルなどのタリム盆地周辺のオアシス，ウルムチ，イリなどである。七，八，九月が収穫の最盛期で，オアシスのバザール及び主要道路の並木の木陰で，さまざまな模様の果皮をもつあふれるほどの甜瓜やスイカが売られている。」（増田泰久氏「新疆の自然とオアシス農業・遊牧」（権藤与志夫氏編著『ウイグル その人びとと文化』朝日出版社，一九九一年，p 87））
  21. 第九三首には「種出東陵子母瓜，伊州佳種莫相誇。涼争冰雪甜争蜜，消得温墩顧渚茶。土産之瓜不滅哈密，食後飲茶一棧，則瓜性易消。」とあり，また第九六首に「甘瓜別種碧團團，錯作花門小笠看，午夢初回微渴後，嚼來眞似水晶寒。瓜之別種曰回回帽。中斷之其形酷肖味特甘脆。但不耐久藏耳。」と詠んでいる。
  22. 「甲申，建烏魯木齊城堡，賜城名曰寧邊。」（『清史稿』卷十二「高宗本紀」）
  23. 注（13），p 78。
  24. 「深深玉屑幾時藏，出土猶聞餅餌香。弱水西流寧到此，荒灘那得禹餘糧。昌吉築城之時，又掘得麪一罌，罌垂敝而麪尚可食。亦不可解。」
  25. 「鄭人有薪於野者。遇駭鹿。…國相曰，夢與不夢，臣所不能辨也。欲辨覺夢，唯黃帝・孔丘。今亡黃帝・孔丘。孰辨之哉。」（『列子』「周穆王」）
  26. 「正月二十日，與潘，郭二生出郊尋春，忽記去年是日同至女王城作詩，乃和前韻。」（『蘇軾詩集』卷二一）
  27. 巴彥弼は滿洲鑲白旗人で烏魯木齊提督の任に就いていた。『閔微草堂筆記』には巴から得た話も記されている。

百部叢書本の分類	嘉慶本との異同
<p>風土23首 (第1～24首)</p>	<p>第4首無し。第5, 6, 11, 12, 首は詩注に異同, 第16首は詩句に異同有り。 ----- 西域の気候, 治水, 築城の様子を主に詠った詩: 23首 (第1～24首)</p>
<p>典制10首 (第25～33首)</p>	<p>第28首無し, 第25, 6首の間に嘉本とは別の一首有り。 ----- 戸籍, 居住に関する制度や住民の生活の様子を主に詠った詩: 35首 (第26～35, 37～45, 47～54, 58, 59, 61～66首)</p>
<p>民俗38首 (第34～70首)</p>	<p>第67首無し, 第41, 2首の間と第56, 7首の間に嘉本と別の一首有り。 ----- 植物, 動物などの自然環境について詠った詩: 43首 (第72～91, 101, 103～108, 113～124, 133, 135～137首)</p>
<p>物産67首 (第71～137首)</p>	<p>詩や注に異同はないが, 順番は内容ごとに整理し並べられている。 ----- 食べ物について主に詠った詩: 28首 (第55～57, 60, 71, 92～100, 102, 109～112, 125～132, 134首)</p>
<p>遊覧17首 (第138～154首)</p>	<p>詩・注, 順番共に異同無し。 ----- 華やかな街の様子を詠った詩: 24首 (第25, 36, 46, 67～70, 138～154首)</p>
<p>神異5首 (第155～159首)</p>	<p>詩・注, 順番共に異同無し。第160首記載無し。 ----- 不思議な話: 6首 (第155～160首)</p>

※下段は筆者が嘉慶本を分類したもの。なお、第〇首は嘉慶本の順番に該当する。

# Impressions of Wulumuqi 烏魯木齊 by Ji Yun 紀昀:

an aspect of the border frontier developed by the Qing 清 dynasty

Hiroko YAMAGUCHI

Ji Yun 紀昀(1724-1805) was an active scholar and intellectual during the middle of the Qing 清 dynasty. He was appointed as editor-in-chief of "Siku qianshu" 四庫全書 in 1773, and devoted all of his energy to this vital position. The unusual, mysterious stories he had obtained during his long years as a government official were recorded in "Yueweicaotang biji" 閱微草堂筆記 (all five versions). Ji Yun had been exiled in Wulumuqi 烏魯木齊 for a period of three years between 1768 and 1771 and had recorded 83 stories about Wulumuqi in his journals. Most of them are about the construction of forts on the edges of the desert and the strange scenery of the western frontier. After he was forgiven for his crimes and on his return journey to the capital, he wrote 160 pieces of poetry ("Wulumuqi zashi" 烏魯木齊雜詩). Some of those poems were quoted in the "Yueweicaotang biji" 閱微草堂筆記. This article tries to consider concretely the changing face of the western frontier that was urbanizing at that time by reading his descriptions.

Wulumuqi was originally only a place of exile far away from the capital until it began to be developed as a city in the middle of the Qing 清 dynasty. From Ji Yun's description, we can visualize the scenery of the town at that time and gain a feeling of the atmosphere of people's everyday lives. Ji Yun did not use his poetry to express the distress he felt due to his exile and his new circumstances, but tried instead to describe the events and experiences of his new surroundings, such as the appearance of farmers, the fun of theatre, the maintenance of the town and active exchanges among its citizens. In "Yueweicaotang biji", he chose to emphasize the more unusual events and themes while somewhat neglecting to describe the towns of the western lands in detail. Still, by reading Ji Yun's vignettes of daily life, we can gain some insight into various aspects of life in Wulumuqi in those days. It may be said that the experience of living in China's rapidly growing, continually changing western frontiers expanded Ji Yun's own literary frontiers.

Keywords: Ji Yun 紀昀, the Qianlong 乾隆 era of Qing 清 dynasty, western area city of China, "Wulumuqi zashi" 烏魯木齊雜詩, "Yueweicaotang biji" 閱微草堂筆記